

敵こそ、我が友 ～戦犯クラウス・バルビーの3つの人生～

2008(平成20)年9月2日鑑賞<テアトル梅田>

★★★★



監督＝ケヴィン・マクドナルド／プロデューサー＝リタ・ダゲール／ナレーション＝アンドレ・デュソリエ（バップ、ロングライド配給／2007年フランス映画／90分）

……すごいドキュメンタリー映画が登場！ 「リヨンの虐殺者」と呼ばれたバルビーが、戦後約40年間に歩んだ第2、第3の人生とは……？ 単純な善玉・悪玉の分類はダメ。人間の多面性を認め、「敵の敵は味方」という現実を受け入れなければ……。そして、それを内向きの「総裁選挙」ではなく、外向きの知恵として活用しなければ！

ケヴィン・マクドナルド監督に拍手！

ケヴィン・マクドナルドは名作『ラストキング・オブ・スコットランド』（06年）を観て私をはじめで知ったスコットランド生まれの監督（『シネマルーム14』106頁参照）だが、1967年生まれだからいわゆる「巨匠」ではない。また私が今回はじめて知ったのは、彼はもともとドキュメンタリーの監督として有名で、長編初監督作品『ブラック・セプテンバー／五輪テロの真実』（99年）は、米国アカデミー賞最優秀長編ドキュメンタリー賞を受賞し、長編第2作『運命を分けたザイル』（03年）では、ドキュメンタリー・ドラマという手法を取り、リアルな遭難シーンなどを再現、日本でも劇場公開され話題になったということ。

そんな彼が『ラストキング・オブ・スコットランド』の後、再びドキュメンタリーに回帰して監督したのが『敵こそ、我が友～戦犯クラウス・バルビーの3つの人生～』。大阪で上映するのはテアトル梅田1館のみであるうえ、内容からしてとても今ドキの若者が観に行く映画ではないが、こんな映画こそ多くの日本人が鑑賞し、学ばなければならない映画。まずは、そんなすばらしい教材をつくってくれたケヴィン・マクドナルド監督に拍手！

これでいいのか、日本人！

北京五輪では星野 JAPAN が完敗し、柔道・バレーボール等で日本は惨憺たる結果に終わったが、その原因の1つが日本人の閉鎖的思考法にあることは明らか。他方、北京五輪終了後、「新冷戦」が起きることを恐れず、グルジアにあるアブハジア自治共和国と南オセチア自治州の独立を承認したロシアの動きを典型として、今なお国際政治は外交だけではなく、軍事力と権謀術数（陰謀？）の中で動いていることは明らかだ。また、人間は複雑な生き物だから単純に善玉と悪玉に割り切ることができないし、政治は人間が動かすものだからキレイ事ですまないことも明らか。

ところが、今ドキの単純でお人好しの日本人は、みんなそれを誤解しているよう。こんな状況の中、これでいいのか日本人！ と思うのは私だけ……？ そんな日本人が人間の厳しさと世界の現実の厳しさを再認識するには、こんな映画を観るのが1番！

知らないことだらけ！ そこで勉強の視点を！

日本人はまず、この映画のタイトルともなっているクラウス・バルビーという人物を知らないはず。また、ケヴィン・マクドナルド監督がこの映画の中で取りあげているテーマも、そのほとんどを知らないはず。つまり、島国で世界から隔離され、一国だけで平和と豊かさを享受している日本人には、戦犯クラウス・バルビーがナチスドイツの崩壊後どこで、どんな人生を送ったかなど、全然興味がないわけだ。しかし、2年後のWBCで日本が再び金メダルを獲得するためには、そんなお人好しのニッポン人のままではダメ。こんな映画を観てしっかり勉強しなければならないのでは……？

それはともかく、この映画の中でケヴィン・マクドナルド監督がインタビューした人々は歴史学者、弁護士、政治家、バルビーの拷問の被害者など多岐にわたるから、バルビーの人生の軌跡をたどるのは決して容易ではない。しかし、それはしっかりあなた自身の目で。そこでこの評論では、何も知らない私たち日本人が当然持つべき疑問点をいくつか指摘し、勉強するための視点を提示しておきたい。

■疑問 その1——クラウド・バルビーって、一体ダレ？

クラウド・バルビーはナチスドイツの元親衛隊保安部（SD）の隊員として、ドイツ占領下のフランスでレジスタンスとユダヤ人の拷問、殺害、絶滅収容所への強制移送をした男で、「リヨンの虐殺者」と呼ばれた男。それだけなら別に珍しくもないが、こんな数奇な人生があるのか！ 歴史とは何とすごいものか！ と感心させられるのは、ナチスドイツの崩壊後、東西の冷戦構造の中でのバルビーの人生。

親衛隊保安部としての活躍が彼の第1の人生なら、第2の人生は第2次世界大戦後アメリカの陸軍情報部（CIC）のために、ターゲットをユダヤ人から共産主義に変えて働くエージェントとしての人生。さらに第3の人生は、なぜか南米ボリビアの裏社会で活躍するクラウド・アルトマンという偽名を使っている人生。

最終的に、バルビーはフランスからの逮捕状で逮捕され、バルビー裁判で終身刑の言渡しを受け、1991年に獄中で死亡したわけだが、第2次世界大戦の終了後40年以上、そんな波瀾万丈の人生を歩み続けてきた人物がクラウド・バルビーだ。

■疑問 その2——ケヴィン・マクドナルド監督は、なぜ今この映画を？

ケヴィン・マクドナルド監督は、なぜ今この映画を監督しようとしたの？ それは、パンフレットの中でインタビューが期待した（？）ような、今さかんに日本で公開されている『ヒトラーの贖札』（06年）や『ヒトラー～最期の12日間～』（04年）などのナチス関連の映画に便乗しようとしたものではない。

彼がこの映画を監督した動機の第1は、バルビー裁判でバルビーの弁護人としてもすごい手腕を発揮したジャック・ヴェルジュス弁護人の調査をしている中で、バルビーに興味を持ったこと。第2は、第2次世界大戦後ファシズムは消滅したと教わったけれども、それは違うということを示したかったこと。ケヴィン・マクドナルド監督はその思いを、映画の副題として、「どのようにファシズムが戦争を勝ち抜いたか」とつけたいくらいです、と述べているほどだ。

よくもまあ、これだけの資料を探し集め、さらにバルビーによる拷問の被害者を含む多くの関係者の証言を集めたものだと、とにかく感心。そしてまた、ドキュメンタリー映画としての編集の冴えも見事という他ない。あらためて、ケヴィン・マクドナルド監督に拍手！

疑問 その3——ドイツ占領下でのフランスのレジスタンスとは？

ポール・バーホーベン監督の『ブラックブック』(06年)は、ナチスドイツ占領下におけるオランダのレジスタンスをテーマとした名作だった(『シネマルーム14』140頁参照)。ナチスドイツ占領下のフランスで生まれたのは、対独協力政権としてのヴィシー政権。ちなみにこれは、日本占領下の中国の重慶で、汪精衛(汪兆銘)傀儡政権が生まれたのと同じ構図だ。そのため、「レジスタンスの牙城」と呼ばれたりヨンでは、フランス人 vs. ドイツ人の戦いの他、対独抵抗派と対独協力派の戦いを余儀なくされることに。

ちなみに、フランス解放後のシンボルとなった人物はド・ゴール大統領とジャン・ムラン元知事、そして文化大臣となった詩人アンドレ・マルローだが、そこに至るまでの道のりは……？ フランスのレジスタンスを描いた名作はたくさんあるから、是非それらの鑑賞を含めたお勉強を！

疑問 その4——なぜ、バルビーがアメリカ陸軍情報部(CIC)へ？

敵の敵は味方。これは『毛沢東語録』の有名な言葉だが、「敵こそ、我が友」というのは、実は昔からの常識……？

枢軸国の1つであった日本を倒した連合国は米・英・ソ・中だが、ドイツ・イタリアを倒した連合国には他にもオランダ・ベルギー・フランスなどたくさんの国が参加していた。第2次世界大戦におけるこれら連合国の共通の敵は「ファシズム」。ところが、第2次世界大戦が終了し、ソ連の影響力が強まり始めると、米・英を中心とする民主主義国の共通の敵は共産主義に移っていった。すると、民主主義の敵である共産主義のさらに敵である「ファシズム」は、敵の敵だから民主主義国の味方……？ それほど単純ではないとしても、そういう構図が成り立つことは明らかだ。

なぜ、「リヨンの虐殺者」と呼ばれたバルビーがドイツから逃げることができたのか？ そこにアメリカ陸軍情報部(CIC)が大きな役割を果たしたことは歴史的に明らからしい。つまり、ナチスの残党集めの中心人物であるバルビーは、CICにとっては対共産主義戦略を立て、その任務を遂行していくために必要不可欠な人物だったから、CICは彼を匿うことになったわけだ。

レジスタンス狩り、ユダヤ人狩り、尋問、拷問、殺害は悪いこと？ それとも、そ

の任務を忠実に遂行できる人間は有能だから大切な人材？ そこらあたりの問題点を、単純な日本人はもっと深く考察しなければならないのでは……？

疑問 その5 ——なぜバルビーが南米ボリビアに？

今、私の手元に南アメリカの地図がある。第2次世界大戦後、南米各国はさまざまな形で、政権派とゲリラとの戦い、軍事政権と民主主義を求める民衆との戦いを経験してきたことはほんやりと知っている。現在最も世界の注目を集めている国は、BRICSの一員であり、南米一の大国であるブラジル。他方、南北に細長い国チリは1970年代のアジェンデ社会党政権の誕生で有名だし、アルゼンチンはペロン大統領とエバとの出世物語を描いた『エビータ』(97年)で有名。それに対して、南米大陸北部にあるベネズエラ、コロンビア、エクアドルは何となく政情不安定で、ゲリラが活動する不穏な国というイメージ……？

そして、南米大陸の中央部にあるのがボリビア。このボリビアにおける軍事政権と民主主義を求める民衆との戦いに、バルビーが大きく絡んでいたというからビックリ。さて、ボリビアでバルビーは一体どんな活躍を……？ それを解くカギの1つが、ボリビアは全く海に面していない国だということ。そうすると、バルビーが設立した「ボリビア海運社」は一体どんなビジネスを……？

ここらあたりは日本人が1番弱いところだから、映画を観た後ネット情報を集めながらしっかりお勉強を！

疑問 その6 ——バルビーとチェ・ゲバラとの接点とは？

キューバの英雄フィデル・カストロを皮肉った面白い映画が『ぜんぶ、フィデルのせい』(06年) (『シネマルーム18』94頁参照) だったし、チェ・ゲバラの青春時代を描いた映画が『モーターサイクル・ダイアリーズ』(04年) (『シネマルーム7』218頁参照)。もちろんこれらは、フィデル・カストロとチェ・ゲバラの人物像に真正面から焦点をあてた映画ではない。

カストロとゲバラの人物像については膨大な資料があるが、元ナチスドイツの親衛隊保安部のバルビーがゲバラの逮捕に大きな役割を果たしていたとは、お釈迦様でもご存知ないのでは……？ バルビーは「ゲバラ殺害の戦略は自分が立てたと自慢し、ゲバラについて『惨めな冒険主義者で、メディアが作り上げた偶像を大衆が伝説化し

ただけ。彼の功績など何もない』と斬り捨てた」らしいが、それってホント……？
それともハツタリ……？ さあ、しっかりお勉強を！

疑問 その7——バルビー裁判とは？

ボリビアから追放されたバルビーが、フランス当局に逮捕されたのは1983年2月4日。4年間の予審を経て、「人道に対する罪」による裁判が開始されたのは1987年5月11日。そして、ヴェルジェス弁護士の懸命の弁護にもかかわらず終身刑の判決が言い渡されたのは、同年7月3日午前0時40分。さて、36日間にわたって連日開廷されたバルビー裁判の実態とは……？

パンフレットにある奈良女子大学文学部教授渡辺和行氏の「バルビー裁判とフランス」によれば、フランスでは「人道に対する罪」を訴因とする裁判が3度開かれたらしい。その第1がバルビー裁判であり、第2が1994年のトゥヴィエ裁判、第3が1997～98年のパボン裁判。日本では戦後1946年に開かれたA級戦犯についての東京裁判や、『明日への遺言』(08年)で有名になったB級戦犯、C級戦犯についての裁判があるが、これらと対比しながら、是非バルビー裁判のお勉強を！

バルビーの人生から何を学ぶ？

以上7つの疑問とそのポイントについてコメントしたが、これらはホントに難しいことばかり。島国ニッポンでは、星野 JAPAN 敗退後は星野叩きを、福田総理辞任表明後は福田叩きと次の総裁選レースを面白おかしく追跡しているが、ホントにそんな単純なことで大丈夫……？

さしずめ、今の日本(のマスコミ)なら、「バルビーはたくさんの人を殺した悪い奴だ。したがって、終身刑は当然」という単純な評価で「ハイ、おしまい」。したがって、なぜアメリカ陸軍情報部(CIC)がバルビーを？ なぜバルビーはボリビアへ……？ などについて突っ込んだ論評などしないはず。それはなぜかという、要するにそれは難しくてわかりにくいから。つまり、そんな難しいテーマは国民受けせず視聴率がとれないから、というわけだ。

しかし、ホントにそれでいいの？ この映画は、そんなヤバい状態にある日本人に与えられた絶好の教科書だと私は思うのだが……。

2008(平成20)年9月4日記